

セネガル ネハナ（セネガルは、いいところだよ）

白銀 有紀

（18 - 1, セネガル共和国, 小学校教諭, 伊勢原市立比々多小学校）

マッサラーム・マライクム。ナンゲンデフ。マンギトゥドゥ ユキ。皆さんこんにちは。セネガル共和国に派遣されました白銀有紀といいます。1年9ヶ月の隊員生活、特に、これといったことは出来なかったと思うのですが、それでも活動や自分の思いを20分に収めるのは難しいということを感じています。私がお話した言葉の中から皆さんなりに消化して、何かお土産として持って帰って頂けたら嬉しいなと思っています。宜しくお願いします。

まず、自分自身の隊員生活を一言で表すというならば「たたかい」という言葉につきます。配属当初、文化や慣習、考え方の違いにより色々なことにぶつかり、もがいてきました。そんなわけで、こんなタイトルを付けてみました。「たたかった1年9ヶ月～セネガルネハナ～」。セネガルに着いた頃、セネガル人やセネガルに対してたくさんのダメ出しがありました。

まず、駄目出しの一つに、泥棒事件がありました。現地語の訓練が終わり、配属されて自分の住む家にいざ行ってみると、玄関が見事に壊され、電化製品は丸ごとなくなっていました。私の家は前任者と同じ家で、色々なものをもらう予定でした。まず、私は学校ではなく警察署に通うことになりました。次に、ちょうだい攻撃です。セネガル人はとても挨拶を大切にしています。職場だけでなく、道を歩いていると見知らぬ人でも挨拶をしてくれます。「こんにちは。」からはじまり、元気？家族は元気？、それから、日本の家族は元気？仕事はどうですか？…そんな挨拶をお互いにします。そして、その挨拶の後には「マイマ」っていうのは現地語なのですが、（被っている）帽子をちょうだい等と言われる事もしばしばありました。子どもだけでなく大人、時には上司もです。私にとって、この言葉は違和感がありました。ただ、少しして、セネガル人からこの言葉には本当に欲しいから言っているのではなくて、話すきっかけとして言っていることもあると教えてもらいました。でも、やっぱり私は「マイマ」は大嫌いで、セネガル人に、私はそれが嫌いなのだと話しました。それから、一番イライラしたのが「インシャーラ」という言葉ではないかなと思います。イスラム教の言葉でもあのですが、日本語で訳すと「神の思し召しがあれば」というのでしょうか。人と別れるときに明日会おうね、「インシャーラ」といったように使います。明日会えたらいいね…でも、怪我や病気で会えなくなることもあるかもね、といった感じです。配属されて、電気や水道の契約は隊員自身がやることになっていました。受付で、電気や水道の受付で長時間待つのは当たり前で、その待つという約束さえも、しばしばすっぱかされることになりました。最後に、また明日ね、「インシャーラ」といわれると、這ってでも約束を守るために来なさい、と無性に腹が立つことがありました。さら

に直接の職場である学校にいくと、「あなたが授業できるように時間をあげるよ。」と言われてたり、先生が授業に平気で遅刻してきたり、途中で出て行ってしまったりしたことも私にはショックでした。そして、それを監督するはずの校長も何も言わないこともありました。今思えば、私が開発途上国の状況について勉強不足だったのですが、“セネガルへようこそ、君が来るのをずっと待っていた。…一緒にセネガルの教育をよくしていこう”そんな風に迎えられと思っていたので、愕然としてしまいました。このように、駄目出しの毎日でした。なぜここにいるのだろう、何のために来たのだろう、自分の存在意義が分からなくなり、赴任当初は濛々としていました。

さて、簡単に国事情について話したいと思います。セネガルはアフリカ大陸の西側にあります。首都はダカールです。こういって、今は変わってしまいましたが、パリ・ダカールラリーを思い出す人もいないのでしょうか。民族は様々な民族があり、それぞれの民族の言葉があります。宗教はイスラム教が大半を占めます。フランスの植民地だったという歴史があり、表記や学校教育の場はフランス語が使われています。

次に、要請内容について話します。配属先はティエス州の教育委員会です。要請概要は、子どもに対してではなく、現地の教員に対して技術や知識を教えて欲しいということでした。セネガルはフランスの学校制度に基づき、教育が行われています。基本的に子どもたちは学校で初めてフランス語に触れ、初めて習ったフランス語で新たな学科を勉強していきます。そのため、実際はフランス語、算数に授業時間が割かれています。私が要請を受けていた音楽や体育といった情操教育は、日本でいう学習指導要領に位置づけられているのですが、やっていないことが珍しくありませんでした。学校のことになると、午前中の授業は8時から13時までです。8時から11時まで休憩がなく、ノンストップで行われます。留年もあり、教室にいくと様々な年齢の子がいました。図にもありますように、初等教育、6年間の初等教育が終了すると、修了試験があります。この修了試験に受からないと中等教育以上、中学校には行かれないことになってしまいます。日本と比べると、セネガルの子どもたちにとって学校はとても過酷な場所だという印象を受けました。それが、セネガルの初等教育の修了率、58%という数字に表れていると思います。

これ以外の教育事情で、先生のモチベーションの低さがありましたが、私が一番気になったのは他のことでした。うまく言葉では言えないのですが、子どもの存在がすごく無視されているなということが気になりました。間違ったり失敗すると、あなたが努力していないから、ちゃんと勉強していないからと教師に怒られたり、また、鞭の使用は法律では禁止されていますが、当たり前のようにあり、教室から子どもの泣き叫ぶ悲鳴が聞こえるということもしばしばありました。それから、教員のストライキが本当にすごく多くて、4月5月6月は月の半分は授業が行えていませんでした。子どもの学習権はどこへやらという感じです。私は、人を作っていくためには、国を作っていくためには、教育はとても大切だと思います。しかし、セネガルでは、その教育が無視されていて、すごく悔しいと思います。いながらも何も出来ませんでした。

こういった教育の状況を踏まえて、要請とは隔たりがありますが、まず情操教育の確保ということを目標にしました。そして、私の帰国後もセネガル人がこ情操教育の指導をする、続けていくことが究極の目標だと思ったので、現地の先生と一緒に授業をおこなうことを最低条件としました。

では、具体的な活動の中身の説明を始めます。主に次の 6 つが挙げられます。順に話をしていきたいと思います。担任と共に情操教育の指導をする。セネガルの図工はほとんど模写のみ、音楽は先生がピアノを弾くことができないので、先生の歌った詩を、子どもたちが続けてまねて歌うというものでした。ということは、先生がとても音痴だと、子どもも自動的に音痴になり、先生がしっかりと歌を覚えていないと、子どもたちもそれ以下になるという状況でした。体育は暑いという気候のせいか、行われていないことが多かったです。たとえ行われていたとしても、先生は木陰で休んでいて、子どもたちは大好きなサッカーをしている、まさに休み時間のような状況でした。教師の指導がなければ、体育とは言えません。私の配属先は教育委員会ですが、実際は市内の小学校に回って、情操教育、音楽・体育に関心がある先生たちと一緒に指導をしていました。授業の前に指導書を使って授業の流れを説明し、先生に指導に積極的に関わってもらうようにしました。また、授業後には、先生の良かったことを必ず伝えるように授業をやっていくことを心がけました。セネガルでは、先生たちも情操教育をちゃんと受けて来なかったし、今では教員養成の期間が 6 ヶ月という短さで、なかなか先生たちが主体になって積極的に授業に関わっていくことが難しいということも分っていました。だからこそ、指導でいいところがあると、褒めるようにしました。

二つ目は、指導の成果を発表する、です。指導する上での目標、情操教育の普及にもなるし、さらに一つの学校での活動が他校へも広がっていくという可能を考え、行事や作品展示をしました。授業で子どもたちが作ったものを教室に掲示したり、左上の絵が教室なのですが、作品を掲示したり、教育委員会や校長室に掲示板をつくったりしました。私の任地ではできなかったのですが、運動会のお手伝いもしました。それから、音楽会を開催しました。

三つ目は、教員へ研修会を開催しました。情操教育に関する実技中心の講習会を行いました。

四つ目は、セネガルの先生たちのために指導書作りを 2 回行いました。1 回目の反省を踏まえて、2 回目はセネガルの先生の意見を聞いて回ったり、教えてもらった歌やセネガルで歌い継がれている歌を採用したりして、先生たちがより教えやすいように配慮や工夫をしました。また、先生たちが自身を持って歌えるようにと CD に師範演奏を録音しました。

それから、放課後は、子どもたちに楽器に触れる機会をと思い、音楽クラブを作って、リコーダーや鍵盤ハーモニカの指導をしました。

最後に、日本の小学校で働いている同期教員から、セネガルの子どもたちと交流しようというテーマで学習に取り組みたいという申し出がありました。それで、平塚市立神田小

学校 6 年生の子どもたちと交流しました。活動の中で、日本の子どもたちから私の元に、手紙が来ました。その中に、とても興味深い質問がありました。セネガル人はどうして黒いのですか？です。思わず笑ってしまいました。

さて、皆様にもっともっとイメージをふくらませてもらいたいということで、これらの活動をいくつかの映像で紹介していきたいと思います…

- ① 多いときは、80 人くらいの子どもたちが教室にいました。残念ながら、先生は横で座っているんですけど。
- ② これは、研修会の際の様子です。セネガルでは、先生の書いた絵をノートに写すことが図工の授業になります。例えば、先生が赤い花瓶を書くと、みんな赤い花瓶を描くのです。私たちは、図工で、それも大事ですけど、子どもたちの想像力や創造力を伸ばすことを大事にしたいと思い、こういう研修会の中では、こんな話を特にししました。
- ③ 私の任地で初めて音楽会を企画しました。先生たちも子どもたちも初めてなので、日本式のやり方でやってみました。先生も指揮で参加してくれているのですが、すごく調子はずれているのが分かりますか。この歌は、「幸せなら手をたたこう」のフランス語ヴァージョンです。この部分は、「幸せなら全部やろう」です。
- ④ これは、日本の学校と交流しようという活動の一部で、日本の友達がセネガルにやってきました。そして、日本の歌を教えました。

日本に帰ってきて、多くの人から、「たくさん学んできたでしょ。どうだった。」と聞かれることがたくさんありますが、実は、どのように返答していいのか詰まってしまいます。というのも、セネガルに何かを残してきた、何かをしてきたと胸を張って言えるものがないような気がするからです。でも敢えて言うとしたら、批判的なことや悪いことは沢山言ってきましたが、実はセネガルが好きなのです。セネガルを離れる時に、セネガルの大好きな家族や友人と離れること、同僚と働けなくなること、素直に寂しいなあと思いました。そういった訳でサブタイトルは、たたかったと書いてありますが、「セネガル ネハナ」、セネガルは良いところだよと記しました。

また、活動していく中で、あることに気付くようになりました。私がセネガルの子ども達に話していることは、日本で私が指導していたことと同じだということに気が付きました。例えば、親切な行為に対して「ありがとう」って言うこととか、友達が失敗したり間違ったりした時にはけなさないとか、それは国籍や文化や環境に関係なく、私はいつも子ども達に望むことです。教師としての子ども達への願いです。この気付きはとても驚きでしたが、嬉しい発見でもありました。そんなことを友人に、セネガル人の友人に話すと、「私達は地球人なんだよ。」って言いました。教師という私の仕事は、地球の子どもを育てること、そういうことなのだと思います。

最後に私のお気に入りの写真を見せたいと思います。私がどこにいるのか、分かります

でしょうか？で、意外にも私が白く映っているのにびっくりしました。こんな風に思えたのは、私がセネガル人みたいになってきたのかな？…だからこそ自分の白さにびっくりしたのだと思います。見た目の肌の色ではなく、一人ひとりの個として、セネガル人と接してきた証なのではないのかなぁと思います。そんなことを気づかせてくれた意味でも、私はこの写真を物凄く気に入っています。まさに、私達は地球人。

最後になりましたが、1年9ヶ月、私は大きな怪我もなく、病気もすることもなく、無事に過ごすことが出来ました。セネガル人の同僚・友人をはじめ、日本にいるみんなの支えがあったからであると思っています。大好きな言葉「ジュルジュフ」ありがとう。そして、以前は大嫌いだった「バベネニヨン」、「インシャーラ」で終わりたいと思います。